

経 済 学 へ の 提 議 (3)

— 基 礎 的 諸 概 念 の 再 検 討 —

友 岡 学

Proposal to Economics (3)

Manabu Tomooka

目 次

1. その序章

【1】一つの科学

【2】起源論的命題

【3】悪循環

2. 自然主義と人間主義

【4】時間と空間

【5】個体と類

(以上鹿児島県立短期大学経済学会「商
経論叢」11号)

【6】物質と非物質

【7】進化と非進化

(以上九州大学大学院「経済論究」12号)

3. 労働と生産

【8】ヒトの労働と動物の労働

【9】代謝ということ

(以上、本稿分)

【10】ヒトの労働のモデル

【11】生産物の概念

【12】労働と生産の諸形態

(以上、本「紀要」14号に予定)

3. 労働と生産

【8】ヒトの労働と動物の労働

—— その区別はいかになされたか？ ——

自明なものを疑え、自明な真理は君の眼をかすめ
てにげる。 モリス・クライン

(『数学文化史』中山茂訳294ページ)

労働は、ヒトの基本的活動である；というのは、それ自体余りにも自明的である。そうであるがゆえに、何が労働であり、生産であるか；ということは、事あらたまって問われたことがないようである。オストヴァルトは適切にもつぎのように言う；「自明的とは一体如何なることであるか。それは、それについて誰も熟考しないような假定である。しかし、既に一度充分にそれについて熟考しているがために熟考しないのと、そこに一つの問題が提起され得るということを未だ一般に考えもしなか

った故に熟考しないというのとでは、大いなる相違がある。而も大多数の場合、自明性とはこの第二の種類ものを指すのが常弊である。(『エネルギー』山県春次訳、岩波文庫、55ページ)

手当りの『経済学辞典』を開くがよい。「労働」と「生産」という二つの項目は、特に「労働」は、殆んどないか、あっても当りさわらずのことが書かれているに過ぎない。多くの場合、労働と生産の概念が不明確なまま、それらによって熟語化された諸用語、たとえば「労働力」「生産関係」等々が、説明されている。「生産関係」と云い得て、なぜ「労働関係」と云い得えないのか？(法律的には、「労働関係法」などの用語法があるが、これは、「労働関係」についての法という意味ではなく、労働に關係する法という意味であろう。)「生産物」と云い得て、なぜ「労働物」と言い得ないのか？「労働力」

と「生産力」とは一応明確に区別されて概念されているが、しかしその区別は「労働」と「生産」の区別に依ってではない。(axとbxの区別は、aとbの区別に帰せられる。労働力と生産力の区別の場合、むしろ、両者に共通する「力」という語の異なった意味に依るように思われる。労働力の「力」は「能力」であり、生産力の「力」は物理学で云う「仕事」の概念に近い。この食い違いは、「労働の生産力」という表現によく見られる。この点、マルクスが初期の頃労働能力(Vermögen)と云っていたのを労働力(Kraft)と云い改めたのが解せない。)「労働」と「労働力」の概念区別は、「労働力の価値が、労働の価格としてあらわれる」という言い方で表現されているし、その点は確かに「俗流」経済学と大いに異なる所である。だが、「労働」そのものについて、マルクス経済学は、「俗流」経済学に対してどれ程斗争的であり得たか？これに対して「労働の二面性」の発見を持ち出して来るかも知れない。なる程、マルクス自身「労働の二面性」の発見と確立は「僕の書物のもっとも良いところ」と自負し、それは「経済学を理解するための枢軸」である、と云う。しかし、マルクスは、もう少し重々しく、「経済学そのものの枢軸」と云った方があるいは良かったのかも知れない。「理解する枢軸」は、どうも「批判する枢軸」とはなり得なかったようである。

マルクスは、労働と生産という言葉、それらによって(マルクスの)熟語化された諸用語とともに、始終使っているが、両者の概念区別を、殊更行なっている気配はない。だが、彼がどのように意味させていたかは、ほぼ知ることができよう。彼は労働の二側面を、一方において「抽象的・人間的労働」、他方において「具体的・有用的労働」に見る。一方が「価値」に、他方が「使用価値」に、それぞれの源泉として対応するわけである。両者は弁証法的に対立していると考えられているようなので(但し、その対立性が貫徹されているものとして必ずしも考えられていないことは、【2】起源論的命題で指摘した通りである。)その対立概念のもとに見ると、奇妙なことが見出される。確かに、「抽象的」は、その対語としての「具体的」に対立せしめられているが、「人間的」は、その対語として従来考えられている「自然的」(あるいは「動物の」)にではなく、全然無関係な「有用的」に対立せしめられている。「有用的」と云えば、「無用的」が反射的に口をついて出るが、これだと「人間的」が「無用的」になってしまうので、これこそ問答無用なのかも知れない。更に、もう一つ奇妙なことがある。「人間的」労働も「有用的」労働もともに「人間的」労働力の支出である；と云う(『資本論』青木文庫版、

1の131ページを見よ)。だが、別のところで、「人間の」労働と「動物の」労働とを区別し、「吾々は人間にのみ属するような形態をとる労働を想定する」と云うのである。(2の329～330ページ)だから、「労働」と云えば、それはすでに人間の労働であるので、人間的労働と云う必要はないだろう。このような混乱は、今まで正されようとしたこともなかったし、正されもしなかった。あるのは、混乱自体に整然とした意味を見出そうとする涙ぐましいがしかし効果のない努力のみであるように思われる。その例を、山本二三丸氏の「人間的労働の経済学的考察(1)」に見よう。(立教「経済学研究」14の4)そして、そのなかに、私なりにヒントを見出して行こう。

山本二三丸氏は、「人間」と動物をつぎのように区別する；

「動物は、その直接的な肉体的欲望に支配されて、自分やその仔のために直接必要なものだけしか生産することができない。」(14ページ)

「動物は、その属している種の基準と欲望とにしたがって、生産物をかたちづくるだけである。」(14ページ)

少し挙足取りめくが、「直接的な肉体的欲望」という表現は、「直接的な精神的欲望」「間接的な肉体的欲望」及び「間接的な精神的欲望」という諸概念をその裏にもつことなしには成り立たない。同様に「直接必要なもの」と云えば「間接に必要なもの」と云えるものもあるであろう。

「人間は、動物とちがって、自分自身の肉体的欲望からはなれて自由に生産する。」(14ページ)(これに続いて「しかも肉体的欲望から自由であるときにはじめて真の意味での生産をおこなうのである。……人間は、いわば全自然を再生産するものということができる…」と云うのは、差し当り余計である。ただそこでは唯物論が消えていることを指摘しておこう。また、「真の意味」の生産が「人間」の行なう生産であるなら、動物の行なう生産は一体虚偽の意味(?)の生産であるのだろうか?!)

「人間は、あらゆる種の基準にしたがって生産することができるし、またどんな場合でも、対象にたいしてそれ固有の基準を付与することができる。」(14ページ)

山本氏が、自分で使っている言葉の意味をはっきり知っているのかどうか、私には疑わしく思われる。というのは、これらの言葉は、山本氏自身のもののように語られているが、実はそっくりマルクスのものであるからである。しかも、マルクスがみずから云って、それに大して重要性を認めていないらしい「人間」と動物の本質的区別に関する肝心の言葉は抜かされている。その重要な

言葉に傍点を付して、マルクスの云う所を引用しよう。

「たしかに動物もまた生産する。蜜蜂、海狸、蟻などのような動物は、巣や住居をつくる。しかしながら動物は、自分やその仔のために直接に必要なものだけしか生産しない。つまり、動物は一面的に生産するのである。ところが、人間は普遍的に生産する。動物は直接的な肉体的欲望に支配されて生産するだけである。ところが、人間自身は肉体的欲望から自由に生産し、しかも肉体的欲望からの自由のなかではじめて真に生産するのである。動物は自分自身だけを生産する。ところが、人間は全自然を生産する。動物の生産物はその物質的肢体に直属する。ところが、人間は彼の生産物にたいして自由に対立する。動物はそのぞくしている種の基準と欲望とにしたがってかたちづくるだけである。ところが、人間はあらゆる種の基準にしたがって生産することができ、またどの場合にも対象にたいしてそれ固有の基準を付与することができる。したがってまた人間は、美という法則にしたがってかたちづくったりもするのである。」（『経済学および哲学に関する手稿』「第一手稿疎外された労働」マル・エン選集補巻4、307～308ページ）

先に指摘したように、肉体的欲望と云うからには精神的欲望が考えられているわけのものだが、これについては直接何も語られていない。ただ「基準を付与する」とか「美の法則にしたがって」とかの云い方のなかに匂わされている。動物について、その肉体的欲望に支配されて云々と云うからには、動物にも精神的欲望の存在を認めるのであろうか（それから はなれて生産するにしても）？(1) つまり、動物は肉体的欲望に支配されて、しかし精神的欲望からはなれて、生産する；が、「人間」は肉体的欲望からはなれて、しかし精神的欲望に支配されて生産する；と云えば、対立性がすっきりしたものになるわけである。だが、そうなれば、マルクスが『資本論』で「商品はさしあたり、その諸属性によって人間の何らかの種類の欲望を充たすところの、一つの外的対象、一つの物である」（1の113ページ、傍点は友岡）と云うのが、おかしくなる。それとも、「何らかの種類の欲望」には「肉体的欲望」は含まれないと云うか？！それは別としても、肉体的欲望とはなれた精神的欲望、精神的欲望とはなれた肉体的欲望があるか？ここで、モーリス・コンフォースの言葉を想起するのは、唯物弁証法にとって皮肉なことである。「唯物論は精神の実在性を否定しない。唯物論が否定するのは、『精神』と呼ばれるあるものが身体からはなれて別に存在するということだ。精神は、身体とはまったく別個のあるもの、

ないしは身体とはまったく別個の実体、ではないのである。」（『認識論』上、理論社、16ページ）同じように、身体が精神からはなれて別に存在する；ということも否定できよう。観念論が精神を身体から引きはなしたとすれば、唯物論は身体を精神から引きはなした。(2) 結局のところ、肉体的欲望という点で「人間」と動物を区別することは何の役にも立たない。

(1) 動物に精神作用を認めるのが最近の学説のようである。ポール・ショジャールは云う；「精神作用は生命の下級の段階にもすでに見られるもの」で「動物もその脳の能力に応じて考える。その思考よりさしてまさっていないものが、言語なき人間の思考である。動物は言語化されない心像を連合して考える。」（『言語と思考』9、115～116ページ）チエルヌイシエフスキーが、つとにそのことを指摘し得たのは真に慧眼と云うべきである。「動物は判断できないといわれる。しかしこれは全くばかげた話だ。」（『哲学の人間学的原理』松田道雄訳、岩波文庫、96ページ）

(2) 「身体と精神とは、人間という分解することのできない一つの全体を、別々の面からながめるときに現われてくる、差別にすぎないのである。」（『人間の生態』＜『人間の科学』1巻＞12ページ。）現代医学が「身心一如」思想に方向づけられていることについては、同書「人間の再建」256ページ以下を参照。だが、この方向は、17世紀の復活であるようである。すなわち、デュボア・レーモンは『自然認識の限界について；宇宙の七つの謎』（坂田徳男訳、岩波文庫、45ページ）で云う；「17世紀には物質と精神の相互作用に関する学説が豊富であった。」

さて、動物が自分のために生産するのが肉体的欲望に支配されてであると認めるにしても、自分の仔のための生産がそうであると認めることができようか？自分の空腹を満たすのが肉体的欲望の一つであるとすれば、自分が空腹であるのに、仔のために餌を運ぶのは一体何の欲望に支配されてであろうか？

動物が自分の属する種の基準に従って生産するというのは、それ自体確かに間違いではない。それぞれの種の動物は、その種に定った食餌を定まった方法で追求するし、生産の目的たる自分自身が、特定の種の個体である。蜘蛛の巣は小鳥の巣にはならないし、蚕のまゆは、他の昆虫のまゆにはならない。だがヒトは果してその例外でありうるか？ヒトは果して「あらゆる種」の基準にしたがって生産するか？確かに、ヒトは、たとえば小鳥の

ために巢を生産することができるように見えるし、牛のために飼料を生産するように見える。一般に、家畜のために、ヒトの種(人類)の基準ではなく、その家畜の種の基準にしたがって、飼料を、畜舎を、等々を生産するように見える。だが、第一に；家畜のために生産したと自分では思っているが、当の動物の本来の欲望にしたがっているかどうかは、当の動物以外には分らない。また、手を加えられただけ、動物は、その本来の種性を失な^て家畜化されているのである。(3) 第二に；家畜のための飼料の生産は、実のところ、ヒト自身のための(自己の種の規準にしたがっての)家畜の生産に外ならぬ。家畜が動物であることを疑う者はないが、家畜が(家畜であるがゆえに)非動物化された存在であることも事実なのである。(4)

(3) この点において、生態学にも不確定性原理が妥当することに注意しよう。動物園のなかの動物や、餌づけされた動物では、その本性が観察する手段によって多かれ少なかれ攪乱される。なお、たとえば、野鳥を保護するために巣箱をかけてやるなどのことは、巣づくりという野鳥の生活にとって重要な機能を疎外する意味で、野鳥にとって好ましいとは限らない。保護される野鳥というのは野生の家畜と同じように背理である。

(4) 「現在の人類は受胎可能の交配を行なうことができるから、一種であるということが出来る。しかし、この種が身体的な形質に於て著しい変異をあらわしているのは、飼養された動物をのぞけば動物界に比類がない」。(三森定男『人類学概論』72ページ、傍点は友岡。)家畜は、ヒトからはなれては、もはや、その家畜の形質や形態のままでは生存できない。

すなわち、ヒトもまた自己の種(人類)の基準にしたがって生産するのであって例外ではない。ただ、「あらゆる種」を、「自己の種のあらゆる個体」に意味させるなら、それは妥当性をもつ。(「あらゆる」ということの意味についての詮索はさし当り抜かす。)アメリカ西部の人の生産した小麦を日本人が食べるのは不思議ではないし、山本氏の書いた(生産した)論文を私が読むのも不思議ではない。しかし、山本氏は犬のために論文を書くわけではない。

結局、肉体的欲望から自由であるかないか；あらゆる種の基準にしたがうかしたかわないか；ということで、「人間」と動物は区別されはしないことが分った。区別されないのに、区別されていると思ひ込んでいるから、

同義反覆がたどりつく結論になる。

「人間が他の動物と異なるところは、労働力をもち、これをはたらかすことによって、自分自身を労働力の担い手として、維持し、発達させるところにある。もし、人間的労働力を機能させないで休止させておくならば、人間的労働力は維持されないばかりか、たえず退化して動物以下の存在に落ちこんでしまう。」(52ページ)

「人間」の代りに「動物」を上の方の文章に入れて見よ。ただし、「動物以下の存在」には代替すべき用語が見当たらない。動物以下の存在ならぬ動物的存在に落ちるのは、人間がすでに動物であるので、落ちようがないからである。むしろ、語るに落ちたわけである。

「人間の名に値するものは、だから、ひとり労働する人間」(52ページ)であるなら(この場合、山本氏は当然労働しない「人間」を想定しているし、これは恐らく、氏においてはブルジョアジーであろう)、全く同様に、「動物の名に値するものは、だから、ひとり労働する動物」である。「人間的労働力の流動たる労働によってのみ、人間は人間として実存することができる」(52ページ)のであれば、「動物的労働の流動たる労働によってのみ、動物は動物として実存することができる」と云える。すなわち、「人間」と動物の区別は、「人間」と動物という言葉の区別以外のものではなかった。

「労働能力(なぜか、ここでは「労働力」という今まで使っていた用語を捨てている——友岡)を構成している要素、つまり人間の身体各重要部……第一に……人間の脳髓……人間の労働能力のもっとも中心的な構成分……人間を動物から区別するもっとも大切なもの……つぎに……神経、筋肉、手、足、感官等……とくに眼と手が人間の労働にとって決定的意義をもつ。」(10ページ、傍点は友岡)。人間には脳髓があり、動物にはない；と云えるなら区別は明瞭だが、残念なことに、動物も脳

髓を持たないわけではない。人間の脳髓と動物の脳髓とで人間と動物を区別するのは、あたかも、 a と b を区別するのに、 ax と bx をもってするのに似る。それに、動物以下の存在に落された労働しない人間でも人間の脳髓を持つにおいておや。「手」については若干の留保が必要だが、神経、筋肉、感官等が、動物の労働に「決定的

意義」をもたないとでも云うのだろうか?! ずばり云って、労働における人間的なものは何か? 答;「人間的労働を特徴づけるものは、人間的労働力の統一的・合目的支出」(13ページ)である。では、労働における動物的なものは何か? 答;「動物的労働を特徴づけるも

のは、動物的労働力の統一的・合目的支出である。」それとも、ひとは、動物的労働に、統一性と合目的性の欠如を見出すと云うか？ それらの欠如を見出すのは、恐らく、ヒトが「自分の種の基準」にしたがって行なった「生産」（思考）であろう。この種の専横主義的思考は根強い。

【9】 代謝ということ

労働と生産をヒトに特有の活動だと考えないで、生物一般の活動だと考えるのは、かならずしも奇異ではない。猿がヒトになるに当って労働が果たした役割をエンゲルスが語る時（『自然弁証法』）には、猿（動物）に労働が結びつけられている。マルクスも、すでに見たように、動物の労働を否定してはいない。ただ動物の労働とヒトの労働を区別する場合に、概念上の混乱を避け得ていないように思われた。それだけなら我慢もできるが、「労働する人間」と「労働しない人間」を区別し、「労働しない人間」は「人間」でない；と云うにおいては、救いのなさを感じるのみである。それは、死んでいる生物と云うのと同様に一つの形容矛盾だが、マルクス主義自体の論理的矛盾でもある。というのは、マルクス主義においては、誤まれる疎外論のゆえに、他方で、賃労働者こそが、「非人間」化されたものであり、動物的であると考えられているからである。（「手稿」マル・エン選集補巻4、299、302ページ等を参照）。すなわち、ブルジョアジーは労働をしないことによって「非人間」的であり、プロレタリアートは、労働の生産物から疎外される（マルクスによれば、労働からも疎外される）ことによって「非人間」的である？！ だが、言葉だけの問題なら、労働しない「人間」は「人間」でない；というのは誤まっではない。というのは労働しない「人間」などはあり得ないからである。ただ、そのことが何ごとをも語っていないだけのことである。それはちやうど、生きていない生物は生物ではない；というのが誤まっではないが、しかし、何ごとをも語らないのと同様である。

動物ならともかく、植物をもふくめた生物一般に労働と生産を認めよと云うのは、ひとびとに心理的抵抗を呼び起さないではすまされないかも知れない。けれども、動物と植物の境界が定かではない以上、仕方のないことである。もっと遡れば、無生物にも労働と生産を認めなければならなくなる。それは理論としては仕方のない成り行きだが、困ることはあるまい。なぜなら、ヒトにおける労働と生産に対応するものとして、生物においては代謝、無生物においてはエネルギーの形態転換があるか

らである。ここで結論を云うのは早い、預告的に云うことが許されるならば、ヒトの労働と生産は、宇宙の自己再生産—自己の否定と肯定—の最も具体的な姿である。つまり、宇宙の実在する内容が、ヒトにおいて、ヒトにふさわしい感覚的表現のうちに、具体化されており、かくして、ヒトによって認識される。ヒトという存在は、顕微鏡をもっても窺うことのできないミクロの宇宙と、望遠鏡をもっても見渡すことのできないマクロの宇宙を、みずからにおいて実現している。認識論的には、それは、ヒトが感覚のうちにあってかつ感覚を越えている；ということに対応する。早く云えば、ヒト自体が宇宙的に実在するから宇宙を認識するのである。

さて、私は、労働（と生産）、代謝及びエネルギー転換の三者を、ヒト、生物及び無生物における同一（宇宙的）運動の三形態だという理解をとりたいと思う。（この理解の仕方を貫き通すには余りにも未開拓なので、以下述べられることは全く一つの試みに過ぎない。今後の思索にまちたい。）三者のうち、法則的に最も明瞭になっているのはエネルギー転換である。周知のように、熱力学の第一法則によって、エネルギー恒存（不変）が明らかにされており、それは質量保存の法則を含むものである。熱力学の第二法則では、新しくエントロピーという特殊な量が考えられた。第二法則は、種々に表現されるが、この場合重要なのは「系」概念である。系を全く無視するところに、宇宙の将来についての楽観論と悲観論が成り立つ。楽観論は開放された系としてのみ宇宙をとらえ、悲観論は閉ざされた系としてのみ宇宙をとらえる。両者とも一面的たるをまぬがれない。両者が対立しているのはエネルギーの二法則が、系について対立しているのに対応する。宇宙が開放された系でありかつ閉ざされた系である；という対立的統一であることは、エネルギーの転換を具体的に考える場合に、考える場として系を限ることを阻げるものではない。(5) 時間空間についても、特定の場には、特定の時間空間が限られるわけである。

(5) ノバート・ウィーナーは云う；「熱力学の第二法則を悲観的に解釈するか或はそれから何らの暗い意味をも読みとらないかという問題は、一つには我々は全体として宇宙をどのていど重視するか、一つにはその中にある局所的にエントロピーの減少する島々をどのていど重視するかによる。」『人間機械論』池原止戈夫訳、みすず書房、31～32ページ。因みに、この原題は “The Human Use of Human Beings; Cybernetics and Society” である。これを「人間機械論」と訳す

のは、ラ・メトリーのそれと結びつけられて誤解される恐れがあるように思われる。

代謝概念の経済学への転用はマルクスに見られるところである。マルクスは各所で「代謝」という語を使用しているが、それには三つの場合がある。（因みに、邦訳者は、**Stoff-wechsel** を「質料変換」と訳し、その本来の生物学上の慣用語を避け、印象的に区別しようとしているように思われる。）一つは、「人間」と「自然」との間（『資本論』13の1149ページ他）二つは、「人間」と「人間」の間、すなわち「人間」内部（1の223、232ページ）、三つは、「自然」と「自然」の間、すなわち「自然」内部（2の338ページ）。最後の「自然」の内部の関係としての代謝は、それ自体、かなり複雑である。生物学で言う代謝の関係を見ればはっきりする。「自然」は生物界と無生物界と考えられておるので「自然」内部の代謝関係は第一に、生物界と無生物界の関係である。また、生物は動物界と植物界であるので、第二に動物界と植物界の関係である。第三に、動物は一般に、植物が行なっている同化作用（無機物の有機物化）を行なわず、他の植物と動物の既存の有機物を同化するのみであるので、植物界と無生物界の関係である。第四に、動物が他の動物を同化する意味では、動物界内部の関係である。等々。この複雑さに絶望しないで、代謝を系統的に整理する方法はないであろうか？

ここで、シュレディンガーの言を聞いておこう。「生きている生物体はどのようにして崩壊するのを免れているのでしょうか？ わかりきった答をするなら、ものを食べたり、飲んだり、呼吸をしたり、（植物の場合には）同化作用をすることによって、と答えられます。学術上の言葉は物質代謝（メタボリズム）と云います。この言葉の語源のギリシヤ語は変化とか交換を意味します。何を交換するのでしょうか？ もともとこの言葉の裏にある観念は、疑いもなく、物質の交換ということです。（英語ではメタボリズム **metabolism** と云いますが、ドイツ語では物質交換 **Stoffwechsel** という言葉を用います。）物質の交換が本質的なことであるとはおかしいことです。窒素、酸素、硫黄等々のどの原子もそれと同種の別の原子と全く同じものです。」（『生命とは何か』岡小天及び鎮目恭夫訳、岩波新書、116～117ページ、傍点は友岡）また、こうも云っている。「どんなカロリーだって、別のどんなカロリーとも同じ値打があることは確かですから、単なる交換がどんなに役に立つのかは理解できないでしょう。」（117ページ）ここで経済学で言う二つの価値（交換価値と使用価値）を思い出そう。同じものの交換は確かに無意味である。そして、その無意味

さのなかに意味を見出そうとする努力が、生氣論、活生論等の名称で呼ばれるものである。シュレディンガーの云う所に一理はあるが、しかし、何かおかしくはないか？ 同じカロリーであるからと云って、ひとびとは食物の代りに石炭を食べても同じことだと考えるか？ 云うまでもなく、シュレディンガーにあっては、交換価値（量的側面）の交換のみが考慮され、使用価値（質的側面）交換は無視されている。

使用価値と交換価値を思い出すということは、代謝の秘密に一步近づくことであるかも知れない。ところが、私には、この両者の概念が必ずしも整然と理解されるものとして確立されているとは思えない。「交換価値の交換」という同義反復的表現。「使用価値の交換」という自家撞着的表現。マルクスにおいては、最初、A商品とB商品の交換ということで、A商品において内的に対立する二者が、B商品において内的に対立する二者と交換される。しかし、この場合でも、A商品の使用価値がB商品の交換価値に、あるいはまた、B商品の交換価値がA商品の使用価値に、それぞれ相互に交換されるものとして、対立せしめられている。すなわち、使用価値（交換価値）と交換価値（使用価値）の交換であって、交換価値（使用価値）同志の、かつ、使用価値（交換価値）同志の交換ではない。このことは、貨幣の登場によっていっそうはっきりする。貨幣は「一般的価値形態」であり、それと交換される商品は、ただ使用価値のみに考えられる。そして、この場合、販売と購買という新しい概念を導入するのだが、この二つの行為が交換の対立的表現であることを、ただ、異なった主体間に見て、同一主体のうちに見ない。Aが販売者である時にBは購買者であり、Aが購買者である時にはBは販売者である。確かにそれにちがいないが、その時、Aが販売者であると同時に購買者であり、Bが購買者であると同時に販売者である；ことが見逃されている。この理解によると、Aは貨幣をもってBの商品を購買すると同時に、貨幣を販売している；のであり、BはAの貨幣を購買していると同時に、自分の商品を販売している；のである。貨幣を販売したり購買したりするという概念は、一般には、より高次の段階のものとして考えられているし、ここでは奇妙に思われるかも知れない。それを奇妙に思う常識が、貨幣の物神的性格につかれているのであろう。物神崇拜からなお免れ得ていない常識には、貨幣は他の商品を購買しうる「使用価値」である；という見解は恐らく容れられまい。なぜなら、貨幣は、使用価値から抜け出た交換価値の塊であり、使用価値は、商品の質料的内容である

；と考えられているからである。

さて、ロバート・ウィーナーは、サイバネティクスで新しく「情報の量」という概念を立てた。これについて彼はこう云っている；「この情報の量は、代数的な符号と選択可能な定数のみでエントロピーと違っている量である。閉じた系の中でエントロピーが目発的に増加する傾向にあるのと全く同じように、情報は減少する傾向がある。エントロピーが無秩序さの大きさを表わす尺度であると全く同様に、情報（の量）とは秩序の正しさの度合いを表わす尺度である。」（『人間機械論』126ページ）シュレディンガーが、生体が崩壊を免れているのは負のエントロピーを外界から摂取している；と云っているのに関連させると、生体と機械の決定的な違いが明らかになる。そして、ここに、W. オストヴァルトが、「神経エネルギー」について語る時に示した当惑から解放される鍵があるように思われる。W. オストヴァルトは云っている；「之（神経エネルギー）が他の物理的エネルギー種であるのか、それとも、特種の力学的エネルギーが音の感覚を起す場合の如き、既知の諸エネルギーの特別な組合せに過ぎないものであるか、は措いて問わないことにする。」（『エネルギー』山縣春次訳、岩波文庫、202ページ）個体的には、生物（生体）では、エントロピーは減少し、情報の量は増大する；が、機械では、エントロピーは増大し、情報の量は減少する。もちろん、両者とも、熱力学の第一法則に従って、代謝されるエネルギーは同一である。情報の量が一方では増大し、他方では減少する；ということの意味は、視野を類的に拡大することによって明らかになる。生物（生体）では個体間に関係はある（ただし、その関係は、すでに明らかにされたように、時間的な関係である）が、機械では原則としてあり得ない。機械は情報を同一標識のもとにある機械の間で伝達し合うのではなく、ヒト相互を媒介するに過ぎない。ただし、機械を通ずる情報伝達においては、別種の機械が連結されることはあり得る。しかし、この場合でも、連結された種々の機械の全体が一つの機械であり一つの系をもつのである。ウィーナーは、これを情報の連結（informational coupling）と呼んでいる。（同書、31ページ）このことは、機械が自己増殖しないことに対応する。機械は、自分と同じ類の機械を産み出すことは決してない。生物の個体において増大した情報の量は、個体自体の組織に記憶として蓄積され、そして、子孫に時間的に伝達される。減少するエントロピーは個体自体を支える。ウィーナーは、「情報（知識）というものは蓄積の問題ではなく過程の問題である」（131ページ）と云っているが、情報の空間的伝達

について、このことは当てはまる。情報の空間的伝達の欠如によって特徴づけられる生物においては、蓄積された情報のみが、遺伝的情報として、精子と卵子を通じて伝達される。この情報こそ、進化の源泉であり、獲得遺伝形質である。周知のように獲得形質遺伝については、替否両論があるが、私はそのどちらかを一方的に採ることとはしない。(6)

(6) 正確を期するために付言しておく。獲得形質の遺伝については、つぎの意見などを参考にしたいものである。『生物科学辞典』（みすず書房）は云う；「獲得形質の遺伝を考えないでは農業の実践は価値の低いものになってしまう。」（37ページ）ジャン・ロスタンは云う；「あらゆる真理がそうであるように、獲得形質の非遺伝性は、好都合も不都合も等しく持っております。その中から最も有利なものを引出すのがわれわれの仕事です。」（『生命：この驚くべきもの』寺田和夫訳白水社、53ページ）もっとも、ジャン・ロスタンは獲得形質の遺伝を否定する立場に立っている。彼においては、ヒトをも生物学的に見ているので、ヒトにおける肉体的な獲得形質の非遺伝性を主張することに力をこめているが（同、51ページ）、この限りでは正しいだろう。ヒトは、生体における進化を超越しているからである。正に、彼がルイセンコを批判しながら云うように、「われわれの遺伝素質は大陸よりも不動」（53ページ）である。ウィーナーが、ワイズマンの試み（ネズミの尾を22代の間切り続けたが、23代目も尾を失ないはしなかった）を評して、「非常に特殊な事情の下に得られた否定的事実は、他の事情の下での肯定的事実を抹殺することにはならぬであろう」（55ページ）と云うのは聞くに値するが、しかしワイズマンの試みが果してラマルク流の考え方を「否定」し得るものである程意味あることかどうか、まず、疑われねばならない。両説はともに正しく、ともに誤まっていよう。増大した情報量を空間的に相互伝達（交換）しうる場合には、獲得形質は遺伝されないし、逆の場合には逆である。だから、生物は人間的であればある程獲得形質の遺伝性を失なうということになる。

生物を、その空間的拡がりにおいて観察し考察するのは、ただ分類学的にのみ行なわれた。生物学と言え、個体の生物学であり、類の生物学ではなかった。ようやく生態学という新しい分野がその穴を埋めはじめたのだが、個体の生物学につきまとう欠陥を、サイバネティクスもなお避け得ていないように思われる。ウィーナーに

よれば「かくも人間的であり、かくも本質的であるこの通信（意志疎通）」（同上書，11ページ）を動物は欠如しており、「我々に疑いの余地をみじんも残さないような仕方人間を他の動物から区別するものは、人間は話す動物だということである。」（同，10ページ）最近の生態学は、動物にも、それなりに、通信（意志疎通）が行なわれていることを教える。それがヒトの言語のように有節音と結びついた言葉でなければならぬ理由はない。またそうであるからこそ、ヒトは、種々のサインで通信し合うことができるのである。ところが、往々にして、チンパンジーを生れた時からヒトなみに育てても、ヒトの言葉をしゃべれないということをもって、チンパンジーの言語能力を否定する根拠にする。チンパンジーに特有の通信手段がヒトの言語でなければならぬ理由があるのであろうか？ こう云うのは、動物はもちろん生得的な形質に主として依存するが、しかし学習によって得られる能力を欠くものではないこと；ヒトはもちろん主として学習に依存するが、しかし決して生得的形質への依存を断っているわけではないこと；を主張するためである。学習によって、チンパンジーがヒトの言葉を語れず、ヒトの子が語れるというのは、チンパンジーの（広い意味の）言語能力の欠如を証明するのではなく、むしろ、ヒトの子がチンパンジーと異なる生得的形質を受けついでいることを意味する。だから、チンパンジーがヒトに育てられてもヒトの言葉を語ることができないように、ヒトの子がチンパンジーに育てられてもチンパンジーの「言葉」を語ることができない。重要なことは、異なった標識をもつ類の間の関係ではなく、同じ類の諸個体間の関係である。

代謝概念が生物学的であったがために、代謝を同一種生物の個体間の関係にまで拡大して考察することが疎そかにされて来たように思われる。それが無理からぬのは、生物は総じて、アダム・スミスが云うように（そして、マルクスもまたそれを「手稿」で引用しているのだが＜選集補巻4，378ページ＞）「動物種族のすべてが、同一種に属しているにしたところで、かれらはたがいにほとんど有用なものではない」（『諸国民の富』大内兵衛及び松川七郎訳，岩波文庫，1の122～123ページ）し、「交易し、交換するという力または性癖が欠如している」からである。代謝によって増大した情報が自分の体の外に空間化されない（したがってまた、交換されない）；というところに生物性の本質がある。それは蓄積されるが、ただ、自分の体の内部に刻印されるだけである。こう云えば、それとは全く対立する人間性の本質は明らかであろう。代謝によって増大した情報は、ヒトに

おいては、外在化され、外的に蓄積され、空間的に相互に移行し、交換され合う。これがほかならぬ生産物であり、生物的生产物が内在的生产物であるとすれば、人間的生产物は外在的生产物である。生産物は外的世界がある系に即して秩序正しさに加工されたものであり、増大し蓄積されるのはこの生産物であって、エネルギーではない。

ここで「剰余労働」の概念に触れておきたい。「剰余労働」ということと「剰余価値」ということの間に一つのディレンマあることを、すでに私は「封建"地代"の非地代性」（九大大学院「経済論究」9号）で触れておいた。そこに、このディレンマを脱する一つの方法を示したのだが、「剰余価値」という呪文からなお解き放されてはいない。そこでは気付かなかったが、そこに引用している岩波『経済学小辞典』の説明は明らかに、結論を前提している。「労働が必要労働時間よりも長い限り、あるいはそれを可能ならしめるだけ生産力が発達している限り、（この条件法に注意—友岡）剰余労働と剰余生産物とはいかなる生産様式においても存在する。」この云い方はおよそ論理的でない。再び山本二三丸氏の見解について見ると、氏は直接法的につぎのように云っている；「人間的労働はつねに『必要労働』と『剰余労働』とから成り立っている。」（上掲稿，26ページ）「人間的労働を特徴づけるものとして、それが労働力の担い手自身の維持＝再生産に必要な生産物より多くの生産物をつくりだす力をもっていること、人間的労働力はそれ自身の必要より多くのものをつくりだす天賦の歴史的才能（!?）にめぐまれていることが指摘されねばならぬ。」（51ページ，傍点は友岡）エネルギー保存の法則にそぐわないことは別としても、この見解は甚だ奇妙である。「原始共産制社会」をどのように説明するのかもよそながら気になる。奇妙さは、つぎの説明のなかに浮き彫られている。「『単純再生産』とか『拡大再生産』とかいうことは人間的労働がつねに『必要労働』と『剰余労働』とをふくむということと直接にはなんの関係もない。

『剰余労働』の生産物部分たる『剰余生産物』を全部個人的に——いわば『不生産的に』——消費してしまう場合には再生産の規模は前回と同じになり、したがって『単純再生産』がおこなわれることになる。」（26ページ，傍点は友岡）これでは何のために必要労働と剰余

労働を区別したのか？ 全部消費されるなら、「剰余生産物」は必要生産物に外ならず「剰余」などあり得ようがない。それとも、必要でないのに消費されると云うか？ むしろ、ここでは、「必要労働」と「剰余労働」の区別

の無意味さが暴露されている。「剰余生産物」を生産するのは、必要だからであって、もし必要でなければ、そのために無意味な時間を費やすこともあるまい。自己を再生産するのに必要な生活資料を生産するのに6時間で足りるとすれば、彼は6時間労働すればよいのであり、後は寝て暮らすだけである。山本氏は、恐らく、「剰余価値」の源泉を説明する必要から、一気に剰余労働がヒトの「天賦の歴史的才能」であるという所まで行かざるを得なかったのであろうが、その道筋が道理にかなったものであるとすれば、「剰余価値」は説明されなものであるものになってしまうし、逆に「剰余価値」が真理であるとすれば、その道筋は道理にかなわぬものになる。

(未完)

附 記 つぎのことをお断りしておきたい。一つは、同じテーマのものを場所をかえて発表したということである。これを掲載するにふさわしい「商経論叢」は年一回の発行なので、量的に3、4年は要する。空間を隔てるよりも、時間を隔てることの方が、私には苦痛に思われた。習慣に反するとはいえ、敢て場所を異に発表したことを諒していただきたいと思う。二つは、本「紀要」のスペースの都合で、最初の目算がはずれて、予告しておいたことが実行できなかったことである。残りの三節は次の「紀要」で発表することになる。